

表の場に偏り、実用面での技術成果の発表を寄せつけない堅苦しさがあつたことがあげられる。その点、今回の技術論文集の新機軸は、どの会員にもなじみやすい点で所期の目的を満足させることができたものと認められる。

創刊号はバラエティに富み、個々の内容も興味深いものがあるが、やや総花的で、どちらかという従来学会誌に近い印象を受ける。号を重ねるにつれて技術論文も増え、論文集としての体裁も整うようになってきている。

全体として土木技術の今日的課題への取組みがよく理解でき、特に「展望」や「対談」にみられる各種技術の変遷と将来の見通し、実用化に向けての研究のあり方等の論議は、われわれ大学研究者の認識を新たにさせ、研究の応用的発展を図るうえできわめて有益な示唆を与えてくれる。先端技術に関する知見をうまくまとめた「資料」や若い土木技術者の誇りと情熱があふれた「つうしん」も楽しく、また勇気づけられる。さらに、新技術の開発とその実用成果の発表を促すために、学会の技術賞候補を本論文集に登載されたものの中から選ぶこと等の検討が望まれる。

同じ投稿論文でありながら、論文集と学会誌とでその取扱いが全く異なるのは問題であり、学会誌は依頼論文に限る等、論文集の独自性を確保するための調整が必要である。これまで土木の各分野において第一人者として活躍された方々から、その苦心談や失敗談をうかがって土木技術の要諦を論じるといった企画も、生きた技術を学びとるうえで若い会員にとっても魅力あるものとなる。

なお、他部門の論文集も分冊化と新しい企画の導入によって、各分野の研究動向を比較的容易に把握できるようになったが、研究の必要性や発展性について説得力に乏しい論文も少なくなく、明確な論理展開や洗練された構成に意を注ぎ、論文集の一層の質的向上をはかる努力が必要であろう。

(筆者・Hiroji NAKAGAWA, 京都大学教授)
工学部土木工学科

妙な土木論

山田 正



私は大学を卒業後、大学以外の社会を経験しないまま大学の教師になっています。そのため実務経験、実務感覚に対するコンプレックスに近い渴望感を抱いておりました。このようなときに土木学会論文集第VI部門が開かれ、現場からの生の論文を読むことができるということは、私にとって一つの楽しみにもなっており、上記の渴えを多少とも潤してくれています。それにしても土木という分野の裾の広いこと、それに対して大学で教え得ることの何となく狭さ（時間的制約に起因しているのだが）。

ところで多くの大学において土木系学生の質の低下が語られるようになって何年かたっていますが、これ自身土木という学問評価の本来の平均値に戻ってきたというべきなのでしょうか。私自身も含めて多くの高校生が将来の自分の進路を土木と決めるときに抱く何とも気宇壮大なロマンにも似た胸の疼きと、大学入学後学ばなければならない“土木工学”という名の学問との間に何と大きな隔たりがあることか。そして興味あることに実務についている人達の何とロマンチストが多いことか。大学の方がかえって狭少で、現実主義的傾向の強いこと。このような大学土木界の雰囲気情報が情報過多時代の高校生に何らかの夢をなくしつつあるのではないかと危惧しています。このような現状を顧みるとき、第VI部門を「工事マネジメントシステム、設計・施工・補修技術、環境公害対策、建設業務、契約・積算」の範囲のみに限定するのは何とも惜しい気がします。もちろん土木学会誌の編集方針との競合性もあり、余り軽々にその内容を拡大するのは考えものですが、私のように常に大学にいて学生に土木工学を教える立場の人間にとって「これが夢のある話だよ」といって語ってやれる部門の論文集が一つぐらいあってもいいような気がします。もちろんその夢の中には工学的見地から見て健全な論理構成に裏打ちされたしっかりとしたものがないといけないとは思いますが、第IV部門のうちの計画にかかわる部分がどちらかといえば将来を把握することを目的としているのに対して、第VI部門の内容はすでに発生した事象を分析した内容が多いように思われますが、これも必ずしもこのように限定する必要もないと思います。過去のガリレオ、

ニュートンからオイラー、ナビエ等の碩学を見ていると現実の問題を解決するために^お鋏を起し、そこから壮大な一般論を導き出しています。大学人としては研究の刺激を常にそのような現実問題の解決の過程から受けるべきだと思いますが、そのとき第VI部門論文集が問題提起の場になることが期待されます。以上自身の反省と第VI部門論文集の今後の発展をお祈りして。

(筆者・Tadashi YAMADA, 北海道大学助教授)
工学部土木工学科

虫歯と地盤改良

奥山 一典



恥ずかしながら、私の歯は虫歯だらけでサイボーグのようです。昨年夏に歯の冠がはずれ、勤務先近くの歯科医院に行ったところ、「これは抜歯する。」といわれました。もう歯を抜くのは嫌なので他に2~3の歯科医院をまわりましたが、同じ診断でした。

なんとか抜歯せずに済まないものかといういろいろ調べていますと、「船橋市の某歯科医院が保健医で腕が良い」と聞き、診察して頂きに行きました。診察室は広く、診療用の椅子が5つ並び、技工士用の大きなカウンターがあり、FM音楽が流れ、10人ほどの医師、技工士、助手の方々が黙々と優雅に働いておられました。

問題の歯は「抜かなくてよい」とのことで、その日から歯根の治療に取りかかって頂きました。歯根の治療と

は根管(神経の通る管)を細いドリル状の針で徹底的に掃除して歯ぐきの炎症を引かせるものです。これは手作業で非常に手間がかかります。とにかく5週間ほどこの治療を根気よく受けると見事に炎症が引きました。

その後、根管に薬液を注入して菌型を取られたので次回には冠をつけてもらえと思っていました。ところが冠ではなく、冠の土台を埋め込まれたのです。どういう事かと質問すると、「土台なしで冠をつけたら、将来もし冠がとれた時には、一から根の治療をしなければなりません。また、隣の歯が抜けた際には、この土台を利用して簡単にブリッジを作れます。先のことを考えて歯の治療をするのです。」といわれました。

私は地盤改良に携わっていますが、地盤改良のあり方を虫歯の治療にみた気がします。それは、

- ① 軟弱地盤の工事において最も重要な部分は地盤改良であり、目立たないがここに最大の努力を注がねばならない。
- ② 構造物の要求性能に応じた地盤改良工法を真面目に効率よく施工することで十分な効果を上げることができ、あえて奇をてらう必要はない。
- ③ 計画された構造物はもちろんのこと、将来それに代わって建設される可能性のある構造物のことも配慮した総合的地盤改良技術が重要である。

などで、心して業務にあたらねばと思います。

1本直ると昔治療した別の冠が壊れ、「あなたは私の仕事を増やす人ですね。」といわれながらも通院しているこのごろです。

(筆者・Kazunori OKUYAMA, 不動建設(株)特殊工法)
專業本部研究室

論文集内容紹介

建設業と技術開発(招待論文)

熊谷 太郎

【土木学会論文集 第373号/VI-5 pp. 5~11 1986.9】

先進欧米諸国からの技術導入に始まり、官民一体の努力によって国際的水準にまで達したわが国の土木技術の発展過程を述べている。次に、社会資本の整備や建設業の活性化など、技術開発の成果を活かすべき目標、および研究開発のために建設業がとるべき方策について述べ、最後に、来るべき21世紀社会のインパクトと技術革新に触れて、今後の建設業の技術開発の方向を示唆している。